

鈴木 龍司

医療法人社団 秀英会 神戸朝日病院 医療技術部

令和の時代に入り、医療を取り巻く環境はこれまでになく速く変化しています。高齢化の進展、地域医療構想に基づく医療提供体制の再編、そしてデジタル化や AI 活用の加速により、医療機関は社会からの期待に応え続けるための新たな対応を迫られています。診療技術の研鑽はもちろん不可欠ですが、それだけでは不十分であり、病院全体の方針と結びつけ、組織の力として活かすことが求められます。

当院は“病気を治し、生活を支える”医療を理念に掲げ、幅広い専門診療に加え、在宅医療・訪問看護・介護との連携を積み重ねてきました。134 床という中規模病院ならではの“融通が利き、風通しの良い”スケール感を活かし、臨床検査部門では「診療に即応する検査体制」と「効率性を重視した運営管理」の両立を課題とし、日々改善に取り組んでいます。本セミナーでは、その経験をもとに臨床検査部門が病院運営と地域医療にどのように貢献できるかをご紹介します。

【職業人教育】

臨床検査技師は高度な技術職であると同時に、医療チームの一員として責任を担う職業人でもあります。しかし教育の現場では「技術さえあればよい」という意識が生まれやすいのも事実です。私は企業勤務の経験から、社会人教育の重要性を痛感してきました。そこで当院では新人教育において、技術指導と並行して法人の理念や組織人としての姿勢を学ぶ機会を設けています。「できない理由を探すのではなく、どうすればできるかを考える」という姿勢を重視し、背景を理解しながら技術を身につける習慣を育むことで、検査の意味を実感できるようになります。これにより「この検査は患者診療のどこに役立つのか」を意識でき、業務へのやりがいや誇りにつながっています。

【情報共有と多職種連携】

臨床検査部門は「診療の裏方」ととどまらず、多職種と日常的に情報を交わすことでその価値を発揮します。当院では、医師からの問い合わせには即答を基本とし、難しい場合でも途中経過を伝えることで安心感と信頼を築いています。早朝の検査で重度の貧血が見つければ直ちに医師に報告し、輸血準備を先行します。新型コロナウイルス感染診療では臨床検査科が起点となり、関連部署

へ即時に結果を共有し、院内対策を主導してきました。さらに IVR 治療など多職種が関わる場面では、検査科が情報を集約し、緊急処置も含めた調整を担っています。情報共有にはホワイトボードなどを用い、誰が見ても分かる形を心がけています。そして何より重視しているのが日々の「挨拶」です。「挨拶」を通じた日常の交流こそが、職場全体の雰囲気や和らげ、組織としての信頼を深める最も基本的で力強いコミュニケーション手段であると考えています。

【効率を高める仕組みとデジタル化】

業務の効率化と標準化を目的として、当院では生化学免疫統合分析装置 VITROS を導入し、精度と効率を高次元で両立させています。乾式スライド方式や自動監視機能は検査の信頼性を高めるだけでなく、夜間の業務分担の変革も可能にしました。すなわち、夜間は看護師が操作を担い、技師は遠隔オンコールで対応する体制を導入し、限られた人材でも安全に運用できる仕組みを整えました。また、検査室で自作した Excel や Access を用いた在庫管理システムにより、属人性を排し、誰が担当しても同じ水準で業務を遂行できる環境を実現しています。さらに最近では AI ツールを活用したマニュアル整備にも着手し、業務効率の向上と知識共有の加速を図っています。これらは単なる効率化ではなく、「人材を守りながら医療の質を維持する仕組み」としての意味を持っています。

【まとめ】

これらの経験から、臨床検査部門は単に検査を担う部署ではなく、病院診療の“背骨”として機能し得ることを実感しています。令和の医療は変革と淘汰の時代であり、臨床検査部門が理念を理解し、多職種と協働し、効率化と標準化を進めていくことが、病院全体の力を大きく左右します。職員一人ひとりが「自分の仕事が確かに誰かの力になった」と実感できる環境を築き、その積み重ねを地域医療の持続可能性につなげていくことこそが私たちの使命です。臨床検査部門には、令和時代の医療を支える確かな可能性が広がっていると考えています。